

第1回 「象牙取引規制に関する有識者会議」

井田 提出資料

2020/01/28

- ① アフリカ・コンゴ共和国でのアフリカゾウに関する情報メモ
- ② 共同通信配信記事のクリッピング
- ③ 同上、共同通信社国際企画・ザンビアのアフリカゾウ保護に関するストーリー

(井田取材、執筆)

アフリカ・コンゴ共和国でのアフリカゾウ（マルミミゾウ、シンリンゾウ）について

井田が2017年に行った取材と2020年1月関係者から聞き取りをした情報

中央アフリカ共和国、カメルーンの3国にまたがる世界遺産地域の一つ、コンゴ共和国のヌアバレ・ンドキ公立公園は、マルミミゾウが多く生息する場所である。

5年ほど前までは、レンジャーや軍のパトロールの貢献もあって、公園内などの密猟は少なく、シンリンゾウ（マルミミゾウ）の生息状況は比較的、健全に保たれていた
環境保護団体や研究者によるモニタリングなども行われ、個体数は比較的、安定していた

最近になって、公園内でも密猟が増えるようになった。政府や環境保護団体の資金難が原因の一つだが、公園外にはほとんどゾウがいなくなったことも大きい

公園内の治安も悪くなる一方、手口は巧妙になっているため、摘発が難しくなっている

旅行者の荷物のチェックなどは行われている。だが、多くの人に乗るバスが定期的に運行されているため、荷物のチェックなどは不十分で、バッグやトランクなどに入れれば、域外への持ち出しは容易

2019年11月にコンゴ共和国北部に行った専門家からの情報によると、

国立公園内を含めたマルミミゾウの密猟は継続しているが、象牙の末端価格は暴落、密猟後カメルーンに運ばれた象牙はカメルーン商人によって保管されているらしい。これは象牙の再高騰化がおこるのを待つためだという。

つまり、密猟業者は中国以外の市場の拡大、中国の闇市場の拡大などに期待している

象牙末端価格は、現地通貨 CFA で 5000-10000CFA/kg、つまり 10-20USD/kg
以前の価格に比べ約 1/10 の暴落である

中国の市場閉鎖は、ポジティブな影響を与え始めているのかもしれない

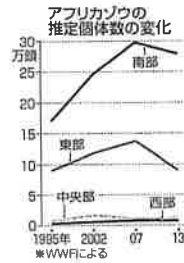
アフリカゾウ密猟深刻



密猟者に殺されたゾウの死骸を調べる担当者＝チャドの国立公園（国連環境計画提供）

象牙目当てのアフリカゾウの密猟が依然として深刻だ。最大の消費国だった中国に次ぎ、英国も国内市場を閉鎖する中、英国の取引が自由な日本に厳しい目向けられている。次のワシントン条約締結国会議でもこの問題は重要議題になる。アフリカゾウ保護と象牙取引の最新状況を追った。

象牙目当て 個体急減



国連自然保護連合（IUCN）によれば、アフリカゾウの個体数は約100年からの10年間で75%減少した。東部、西部、中央部のいずれでも、密猟が激化し始めた。世界自然遺産基金（WWF）によれば、

取引自由の日本に非難

（W）E）ジャババ 密猟前に手に入れた象牙を、密猟者が密猟現場で象牙を加工して象牙製品を製造している。象牙製品は象牙の密猟を助長している。象牙製品は象牙の密猟を助長している。象牙製品は象牙の密猟を助長している。

象牙製品は象牙の密猟を助長している。象牙製品は象牙の密猟を助長している。象牙製品は象牙の密猟を助長している。

象牙製品は象牙の密猟を助長している。象牙製品は象牙の密猟を助長している。象牙製品は象牙の密猟を助長している。



愛知県内の店頭に見られた象牙の印刷材料＝4月24日

日本から中国へ象牙密輸

出所不明、ネット取引多数

中国のメジャーは4月半ば、ウルムチの税関が中国国内の11の異なる象牙密輸ネットワークを露した。昨年、日本から、おもちゃとして送られた象牙の中に、象牙の加工が入っているのを発見したのがきっかけで、日本に仕入れている象牙のほとんどが、中国に送られた。



2017年8月、中国当局が押収した日本から違法輸入された象牙製品（中国・河北省石家庄市税関撮影／WWFジャパン提供）

石家荘海関偵破「7.25」 珍貴動物制品走私案

止した。だが、大半の象牙製品は中国で製造された。象牙製品は象牙の密猟を助長している。象牙製品は象牙の密猟を助長している。象牙製品は象牙の密猟を助長している。

政治的決断が必要
ワシントン条約に賛同したのに、象牙の密輸が依然として深刻だ。最大の消費国だった中国に次ぎ、英国も国内市場を閉鎖する中、英国の取引が自由な日本に厳しい目向けられている。

マンモスの象牙
中国で需要急増
ワシントン条約は、象牙の密輸を禁止している。象牙製品は象牙の密猟を助長している。象牙製品は象牙の密猟を助長している。象牙製品は象牙の密猟を助長している。



2月、由、訪の密輸



東西の冷戦終結から2019年で30年。国連によれば、76億を超える人々が地球上に暮らす。テロや自国優先主義の拡大、そして地球環境問題の深刻化……。国際秩序が大きく揺らぎ、世界が不安定化する中、自らのよりどころとなるものを求めて行動を始めた人々がいる。新たな海図を描こうと試みる姿を世界各地に追った。

密猟者と命がけの戦い 貴重な自然、なくせない ザンビア

2019.9.25 17:06 ● 共同通信

「あそこに群れがいる」。四輪駆動車のハンドルを握るガイドのダニエル（46）が指さす森の中に、10頭ほどのアフリカゾウがゆっくりとこちらに向かってるのが見えた。車を見て威嚇するように先頭の大きなゾウが前足を上げる。2本の白い牙が朝日に輝く。

アフリカ南部ザンビアの中西部、世界有数の広さを持つカフエ国立公園は、この国のアフリカゾウの主要生息地の一つだ。

大きなものでは体重7トンを超す、地上に現存する最大の動物は、この美しい牙目当ての密猟で、毎年、2万頭以上が殺されているという。ここカフエも例外ではない。

▽ヘリコプター

「2018年の前半、分かっているだけで、カフエともう一つの国立公園で20頭近くのゾウが殺された。昔はもっと大きな牙を持つゾウがいたが、最近はずっかり見かけなくなった」とダニエル。「ちょっと前に銃を持った3人の密猟者が逮捕されたのはこの辺だ」と、公園の中の道を運転しながら事もなげに言う。

「密猟者はヘリコプターや強力な銃器を大量に持っている。われわれの装備も資金も彼らにはかなわない」。公園の片隅にテントが立ち並び「特別密猟対策ユニット（SAPU）」の敷地の中。大きなテントの前の階段に腰を掛けたレンジャーのキングスリー・ムサダが静かに話し始める。彼は55歳、この道28年になるベテランだ。



アフリカ南部ザンビアのカフエ国立公園で生息するアフリカゾウの群れ。密猟者の標的になっている＝2018年8月（共同）

ヘリでゾウの群れを追いかけ、上空からAK47のような自動小銃で撃ち殺す。牙だけを切り取って、ヘリコプターで運び去る。強いワイヤ製のわなを仕掛けてゾウの足が抜けないようにする。ムサダは、こんな密猟者の手口を教えてくれた。

「最近、増えているのがカボチャなどの餌の中に強力な毒を入れてゾウを殺すやり方だ。犬を使って弱ったゾウを追いかけるんだ。2週間ほど前に、知らせを受けて急行した時には、中毒死して牙のないゾウの死骸が転がっていた」と苦々しげだ。「せめてわれわれにもヘリコプターがあればなあ」

▽需要があるから

1989年、ワシントン条約で国際取引が禁止されて以来、減少傾向にあった象牙目当てのアフリカゾウの密猟は今世紀に入って、再び、急激に増え始め、一部では絶滅が懸念されるまでになった。中国など新興国の急速な経済成長とアフリカとの経済的つながりの拡大が背景にある。

「比較的多くの数が残っている南部アフリカのゾウが密猟者の標的になっている。隣国のナミビアなどはザンビアよりもっとひどいかもれない」とダニエル。

アフリカゾウ絶滅への危機感や、象牙の密輸、密猟を助長していることへの批判の高まりを受け、最大の消費国だった中国は2017年末に国内の象牙市場を閉鎖し、一部を除いて国内取引を禁止した。その中で「過去の合法的に入手されたものだ」として印鑑や装飾品、和楽器などの象

象牙製品が広く売られている日本への国際的な風当たりは強まりつつある。

象牙の密猟、密輸問題に取り組む環境保護団体「環境調査エージェンシー（EIA）」のダニエル・グラビエル（40）は「世界に残る大きな象牙の市場は日本だけになった。しかも国内の違法取引監視制度は抜け穴だらけで、中国に違法に持ち出されるものも多い」と手厳しい。

ムサダの同僚のシルベスター・シャミリナド（56）も「政府の密猟対策強化や海外の環境保護団体からの支援もあって密猟は徐々に減ってきているが、象牙に高い金を払うという需要がある限り、密猟はなくなるらない。日本はなぜ、いつまでも象牙を使い続けるのだろうか」と首をかしげる。

▽貴重な財産

貧弱な装備と武器で、組織化された密猟グループと戦うことには常に命の危険を伴う。14年には別の国立公園でレンジャー部隊の幹部が密猟者に銃で撃たれて命を落としたことが大きなニュースになった。

ムサダにも、発砲された経験がある。「銃弾は顔のすぐ近くをかすめて外れたけど、少しずつ危なかった。命を落とした同僚は何人もいるし、大けがをした者もいる」

それでもレンジャーが天職だ、と言うムサダ。「まだ多くのゾウがいるザンビアの自然には計り知れない価値がある。アフリカゾウがいなくなったら、ザンビアは本当のザンビアではなくなってしまう」と話す。

太陽が傾きかけたSAPUのキャンプで別れ際にムサダはこう言った。「日本でまだ、象牙を合法的に売っているとは知らなかった。僕がそれを知らないように、日本人々も本当のアフリカゾウのことを知らないだろう。ぜひ、野生のゾウを見にここに足を運んでほしい」（敬称略、文・井田徹治、写真・中野智明）



アフリカ南部ザンビアのカフエ国立公園で、象を餌にハトロールするレンジャー＝2018年8月（共同）

取材後記

最も危険な仕事

発展途上国の国立公園と、そこにいる野生生物を守るレンジャーは、世界で最も危険な仕事の一つとも言われる。野生生物の違法取引には組織化された犯罪集団が関与することが多い。使われる武器は強力な上、資金も潤沢で、多くの場合、レンジャーの力は足元にも及ばない。せっかく犯人を逮捕しても罪に問われないことが多く、逆に仕返しにおびえることになる。

象牙に限らず、ペットや水産物、木材製品など日本国内には途上国で絶滅の危機に立つ生物やその製品が多く出回っている。間違っても途上国のレンジャーの命を脅かして得られたものに手を出してはいけないのだが、それを防ぐ日本の法制度にも、消費者の意識にも多くの問題があるのが実情だ。

